

インドネシアにおけるイスラムの グローカリゼーションとサブ・ナショナル化

モナッシュ大学との共同プロジェクトについて

森山 幹弘

MORIYAMA Mikihiro

1

昨年の2010年6月からモナッシュ大学と南山大学宗教文化研究所との共同プロジェクトが始まった。このプロジェクトは、日本学術振興会に相当するオーストラリアの公的研究助成機関であるオーストラリア・リサーチ・カウンシルの「ディスカバリー・プロジェクト」にGlocalization and Sub-National Islams in Indonesia: Neo-Traditionalism, Local Islam, and the Commemoration of Regional Islamic Legaciesの標題のもと採択され、3年間にわたって研究助成が行われることが決定したものである。

当初の予定では、企画者であったモナッシュ大学の文学部、政治社会問題専攻のジュリアン・ミリー講師が、オランダのライデン大学と南山大学との3つの教育研究機関との共同研究プロジェクトを計画していた。メルボルンにあるモナッシュ大学はオーストラリア国立大学と並んで、インドネシア研究において実績のある教育研究機関であり、またライデン大学は19世紀からインドネシア研究の世界的な中心として知られてきた。

しかし、ライデン大学が参加しないこと

となり、2つの機関の共同研究として研究助成の申請を行った。申請に際しては、個人ではなく機関として共同研究のパートナーとなることが望ましいこと、また研究テーマがイスラムに関するものであることから、小職が宗教文化研究所の研究所員となることを機関決定した上で、正式に共同研究プロジェクトに申請することが適切との判断があった。モナッシュ大学も、申請に際しては、ミリー講師が所属する政治社会問題専攻の長であり、伝統的イスラム研究において実績のあるグレッグ・バートン教授が加わり、3名による共同研究の体制を採ることとなった。

本研究プロジェクトの目的は次のとおりである。より厳格で、単一的、普遍的、時には暴力的でさえあるグローバル化するサラフィズム（イスラム初期世代 [=サラフ] への回帰を目指すイスラム復興思想）の近年の状況が見られる中で、インドネシアにおいては地域に根ざした伝統派、新伝統派の興隆が見られる。このグローカリゼーションのプロセスを理解するために、西ジャワおよび東ジャワのインドネシア独立以前の象徴的な宗教指導者を記念する活動を検証することで、いかに地方的な忠誠が宗教

行為の中で形成されていくのかを研究することが、本プロジェクトの目的である。この目的のために、その社会的、政治的な影響を射程に入れつつ、地方のイスラムの特徴とダイナミズムを理解すること、将来の見通しを評価することが重要な鍵となる。

より具体的には、インドネシアの各地域の人々が自らの地域の宗教的な特徴に基づいて行う活動や記念行事を調査することを通して、本プロジェクトは現代のインドネシア社会におけるサブ・ナショナルなイスラムの役割を明らかにしていく。イスラム社会の近年の発展に関する研究の多くは、むしろトランス・ナショナルな展開に焦点を当ててきた。それに対して、本プロジェクトではどのようにムスリムがサブ・ナショナルな伝統に、いわば内向的に向かっていくのか、またその過程において、どのように社会的、宗教的な多元性を尊重する自らの信仰を理解し、実践していくために土着のアプローチを展開し、維持していくのか、さらに寛容な姿勢をどのように育てているのかを考察していく。地域のアイデンティティの復活が起こるという状況は、国民的価値に照らせば、むしろ信仰の後退現象と見なされていることに対しては批判的に考察していかねばならない。その上で、この研究プロジェクトの取り組むべき点は以下の点にまとめることができる。

- ・インドネシアのムスリムによって、象徴的なイスラムの指導者が地域レベルでどのように記念されているのか、その記念の営みに対して当該社会共同体はどのように関与しているのかを調査する。
- ・国家を基盤とするイスラムのアイデンティティへの相補的軌跡として、中央と地域の関係および宗教観の調和に対して、記念行為の枠組みを設定し、その影響を

評価する。

- ・これらの調査結果を他民族の住民を抱える他のイスラム国における発展と対置させる。

1945年の独立以前は、今日、我々が地域文化（ジャワ、スンダ、マドゥラ、バタック、ミナンカバウなど）と呼んでいる文化の形態と実践を通して、蘭領東インドのムスリムは自らのイスラムに意味付けを行っていた。そのため、20世紀の初頭の民族主義運動が勃興するまで、注目すべき地域横断的なイスラム的な性質の集成は見られなかった。ムスリムはアラビア語とともに、地域言語であるジャワ語などを用い、地域的な伝統に則って自らの宗教を信仰し、実践していた。

独立後には、インドネシアの多様な民族集団はインドネシアという統一的な国民国家のもう一つのアイデンティティを獲得する。しかし、彼らは元来の民族集団のアイデンティティを放棄したわけではなかったにもかかわらず、ジャワ・ムスリム、スンダ・ムスリムという立場を失ったかのように見えた。それはインドネシアにおいてはムスリムとしてのアイデンティティは民族集団のそれと同様に扱われなかったからである。「多様性の中の統一」というスローガンのもとで、民族の多様性が国民文化の源として保護される一方、民族イスラム（エスニック・イスラム）という考え方は公の言説においてはまったく不在であった。このことが、イスラムがインドネシア人としての集団的アイデンティティの枠組みを形成する際に影響している重要な地域的、民族的（エスニックの）原動力を隠蔽してしまっている。独立以後、インドネシア人は様々なサブ・ナショナルなイスラムを作り上げてきており、それが現在では拡大の傾向にあること

に鑑みると、隠蔽された上記の原動力を明らかにすることは、インドネシアのイスラムの重層性の理解を深めることになる。

現代のインドネシアで地方文化の復活が見られる中、地域の記念活動がより重要な意味を持ってきていることを考えると、本研究プロジェクトのテーマは時宜に叶ったものと言える。さらに、本研究はイスラム社会の発展における重要な点に焦点を当てている。つまり、複合的な面でインドネシア社会が大きく変化しつつある中で、人々は現代のイスラムの公的な言説に対して別の選択肢を模索しているという点である。世界的なイスラムがムスリムの信仰と実践の均質化に固執していることを取り入れようとしつつ、地域の選択肢もまた取り込んでいこうとしている。本研究プロジェクトではこのようなリージョナルなイスラムへの転換の実態を明らかにできるだろう。

バートンは伝統的なイスラムに焦点を当てて、世界につながるインドネシアの20世紀のイスラムの政治と知識人の動静についてこれまで研究を行ってきた。ミリーは、ローカルなレベルで実践されてきたイスラムの伝統とムスリム社会、特に宗教指導者を顕彰する西ジャワの共同体の記念行為について研究を積み上げてきた。森山は西ジャワの歴史的な文化の変容の研究成果を基盤として、地域文化、特に近年の地域の復興について研究を行ってきた。上記の研究目的を達成するために、このような研究の背景を持つ3名の研究者が3年間の共同研究を行うのが、本プロジェクトである。

2

本共同プロジェクトの最初の活動は2010年10月14日にインドネシアのバンドン市にある国立スナン・グヌン・ジャティ・イ

スラム大学で開催された国際ワークショップ「西ジャワにおけるイスラムと地域性：2010年のひとつのスナップショット」であった。以下のワークショップの趣旨に基づき、活発な討論が繰り広げられた。

西ジャワ州の住民（その大多数はスンダ人）は自らのアイデンティティの第一の拠り所をイスラムに求める。イスラムは彼らの社会的、政治的な日常に大きな影響を与えている。これまでから、西ジャワはインドネシアの他の州の住民よりもムスリムとしてのアイデンティティがより強いとされてきた。しかし、同時に、西ジャワ州のムスリムによって実践されるイスラムは一枚岩ではないことも知られている。それらは様々な異なる意味を持ち、時には対称的なものでさえある。これらの相違こそが西ジャワのイスラム文化を豊かにし、多様している一方で、社会的および政治的な変化を背景にして、時には煽動され、利用されることもあった。

多くのスンダ人はスンダ人としてのアイデンティティがムスリムであることと一体化することを問題としていない。「スンダはイスラムである」という言説さえある。しかしながら、近年の事象はこのような見方の単純さに対して、果たしてそれほど単純なものなのか問題を投げかけている。2010年の現在、世界の宗教を信奉する人々は突然の変化と脆弱性に対峙させられており、宗教的と民族的な帰属が安定の源としての重要性を増している。しかし、同時に、これらのアイデンティティは互いに衝突し、時には意図的に対抗関係に曝されることがある。

第一回目のワークショップでは、上記の現実の問題に目を向けながら、西ジャワのコンテキストにおいて「イスラムと地域性」

について議論が行われた。ワークショップには、研究者だけでなく、スンダ文化、宗教、政治、社会の様々な分野で活躍している活動家、文化人などが招かれた。発表者はそれぞれの専門的な立場から「イスラムと地域性」の重要性についての議論を展開し、活発な意見交換が行われた。

当日は会場となった国立スナン・グスン・ジャティ・イスラム大学のダダン・カフマッド教授が主催者として挨拶を行った後、丸一日のワークショップが開催された。会場はおよそ50名の聴衆で満たされた。ほとんどが、バンドン市を中心とする西ジャワ州に在住する研究者、文化人、ジャーナリスト、イスラム関係者、大学院生であり、州外からの参加者はほとんどいないようだった。最初に、もう一人の主催者であるモナッシュ大学のグレッグ・バートン教授が趣旨説明を行った後、以下の7名がそれぞれ論文を発表した。

- 1 Kusnaka Adimihardja (パジャジャラン大学教授)「スンダ社会の伝統儀礼とイスラム」
- 2 Mikihiro Moriyama (南山大学教授)「スンダ語とイスラム：2010年のポートレート」
- 3 H. Asep Saeful Muhtadi (スナン・グスン・ジャティ・イスラム大学教授)「西ジャワの村落社会のムスリム間のコミュニケーションの伝統」
- 4 Dr Julian Millie (モナッシュ大学)「イスラムの修辞における革新と伝統：西ジャワのケーススタディ」
- 5 Mr Chaidar S. Bamualim (シンガポール国立大学)「西ジャワの村落におけるイスラム化、政治、神秘主義」
- 6 Mr Acep Zamzam Noor (チパスン・イスラム教育施設)「気楽なスンダ、気楽なイスラム」
- 7 Linda Hindasah, MA (PPIM)「インドネシア・ウラマ・協会のファトワと地域性：西ジャ

ワのケーススタディ」

各発表の後には、それぞれ短い質疑応答の時間が設けられた。全体の発表の後に昼食をはさみ、16時まで全体の討論が行われた。参加者は教育研究に携わるものだけでなく、社会活動や実践的な文化、宗教活動を行うものも多かったため、単に学術的な議論に留まらず、非常に広範囲なトピックについて、実践的、多様な観点からの議論が展開するところとなった。特に、バンドン工科大学内にあるサルマン・モスクの政治性については、学生運動の歴史的背景とその後の政府との関係、また社会問題となった近年の事件に対する同モスクの役割について熱気のこもった議論が行われた。もう一つ特記すべきトピックは、近年、インドネシアのイスラムの異端派と見なされ、そのモスクが各地で閉鎖に追い込まれたり、騒動が発生したアフマディアの問題についてであった。西ジャワにおいてもムスリム社会の危うさが露呈したケースとして討論が行われた。

今回の国際ワークショップで発表された論文は、モナッシュ大学のミリー講師によってワーキングペーパー集として編纂・出版が予定されているところであるので、個々の論文についてはそちらに譲ることとする。

3

最後に、上記の国際ワークショップで発表した私の論文「スンダ語とイスラム」について、スンダ語について紹介するとともに、その要旨を簡単に紹介して、この報告を締めくくりたい。

スンダ語は、インドネシアで地方語「バハサ・ダエラ」と呼ばれる500以上の民族集団の言語の一つである。主としてジャワ

島の最西端のバンテン州（2001年に西ジャワ州から分離）と西ジャワ州で使用され、2000年の統計によると、スダ語を第一言語とする人々はおよそ3000万人（インドネシアの人口の15%）とされている。スダ語は、ムラユ語（英語ではマレー語と呼ばれる）に代表されるオーストロネシア語族に属する言語であり、ムラユ語と語彙を共有するものも多いが、最も近い言語はジャワ語である（梶ほか2009, 126-129頁）。

オランダ植民地政庁は、19世紀初頭から植民地下の住民を活用して効率的に植民地経営を行なおうとした。そのために必要とされたのは読み書きと算術ができる「原住民」の役人であった。スダ人が大多数を占める西ジャワ州は、蘭領東インドの中でもコーヒーなどの商品作物を産出する重要な地域であり、多くの官吏を必要としていた。その故に19世紀の半ばからスダ人の子弟の教育に力を入れた。土地の面積、収穫を計算するための算術はムラユ語で教えられたが、読み書きはスダ語が教えられた。

元来、スダの人々は日常生活ではもっぱらスダ語を使用し、ほとんどがスダ語だけのモノリンガルであった。しかし、貴族階層を主とするオランダ植民地下で学校教育を受けた者は、後にインドネシア語と呼ばれるムラユ語に通ずる者、さらに上の教育を受けた者はオランダ語を解する者もいた。社会階層、教育レベルが上がるのに対応して、一種の言語のピラミッドのようなものが形成されていたと言えるだろう。下から、スダ語、ムラユ語、そしてオランダ語と積み上がっていた。

蘭領東インドの多くの住民がモノリンガルであった時代は、1945年の独立宣言とともに、実質的には1950年頃から変わって

いった。インドネシア語が国家語（Bahasa Negara）として1945年憲法に謳われ、独立国家インドネシアの統一言語として政治的にその普及と確立が図られたからである。当時は、多くのスダ人にとってのインドネシア語は新しく学ばれる言語であった。実体としては、そのインドネシア語は植民地時代から連続するムラユ語であり、まったく新しい言語であったわけではないが、「きちんとした」国語は学校で教科書を使って学ばなければならなかった。当初は、インドネシア語は小学校の4年生から教えられ、教科書の記述にはインドネシア語が使用されていたが、低学年のクラスではスダ語が教授言語として使われていた。

独立後のインドネシアは、政治的にも経済的にも混乱した時期が続いていたが、1965年の9月30日事件を機に政権がスカルノからスハルトへと移ると、インドネシアは開発を旗印とし、軍事独裁体制の下で政治と社会は次第に安定していった。言語政策について見ると、スカルノ時代からの国家統合を最優先する政策の下で、インドネシア語を国語とし、唯一の公用語とする単一言語政策が推し進められてきていたが、その政策はスハルト体制になり、国家の安定のためにいっそうの拍車がかかったと言える。つまり、公的な空間からスダ語のような地方語は排除され、地方語は家庭などの私的空間と文化などの非政治的な場に限って使用することが推奨されたのである。その結果として、都市部を中心としてスダ語を解さない、あるいは満足に使用できないスダ人が増えていった。

都市部を中心として子供たちのインドネシア語の能力が向上すると反比例して、彼らの地方語の能力は低下していった。その危機感から中央政府は1980年代から地方

語と地方文化の保護・育成の政策も合わせて実施するようになり、90年代には新しい教育カリキュラムを編成し「地方独自内容」の科目を導入した。さらに、1998年のスハルト大統領の退陣とともに自由化、民主化の流れができ、その中で地方分権が政策的アジェンダとして明確に示されると、地方分権は政治、財政の面に留まらず、文化面にも及び、地方独自の文化振興策や州独自の教育改革を導き出した。すなわち、2010年までの最後の30年間は、近現代の歴史の上で、スンダ人が自らの民族のアイデンティティに向き合うことを余儀なくされた時代であったと言える。その中で、スンダ人の中には自らのアイデンティティの喪失という危機感を抱く者もでてきた。

そのような状況で、スンダ人はイスラムをどのように自らのアイデンティティと結びつけて考えてきたのかが、今回のワークショップで問われなければならない課題の一つであった。言語とイスラムについて考えると、スンダ人は1日5回の祈りをスンダ語で行うのか、インドネシア語で行っているのか、単純であるが問われなければならない問いである。インドネシア人のムスリムの祈りの前半は定型のコーランの章句を唱えるわけであり、そこではアラビア語を用いることになるが、最後に捧げる祈りはそれぞれの言語で行うのが普通である。そこでわかってきたことは日常生活において、もはやスンダ語を使用しなくなった人々は、祈りもインドネシア語で行う傾向があるということである。スンダ語は日本語のように、謙讓語、尊敬語、丁寧語という複雑な敬語体系を持っており、敬語を使いこなせない世代は、神にたいして不敬となることを怖れてインドネシア語を使用する傾向があるという。日常生活で使用する日常

語レベルのスンダ語を運用する能力しかない人々にとっては、スンダ語を使用することに躊躇がある。上述のように、私的空間での使用へと追い込まれたスンダ語は、極めて私的な空間である精神世界で使用される言語という位置を保持していると考えられるのだが、その空間においても、敬語体系を修得していなければ、スンダ語は使用されないということに注目する必要がある。

スンダ人のアイデンティティの拠り所として、スンダ語は様々な文化的アイデンティティのなかで重要であるとスンダ人自身によって考えられている。しかし、もう一つのスンダ人のアイデンティティとして重要な要素としてのイスラムと結びつけて考えると、その宗教実践においてスンダ語の衰退が見られることは、スンダ語が今後も衰退を続けていくことを暗示しているとも考えられる。

参考文献

- Barton, Greg. 2002. *Abdurrahman Wahid: Muslim Democrat, Indonesian President: A View from the Inside* (Honolulu: University of Hawai'i Press).
- Henley, David and Jamie Davidson, eds. 2007. *The Revival of Tradition in Indonesian Politics: The Deployment of Adat from Colonialism to Indigenism* (London: Routledge).
- 梶茂樹、中島由美、林徹（編）『事典 世界のことば 141』大修館書店、2009年。
- Khalili, Laleh. 2007. *Heroes and Martyrs of Palestine: The Politics of National Commemoration* (Cambridge: Cambridge University Press).
- Ma'shum, Saifullah. 1998. *Karisma ulama: Kehidupan ringkas 26 tokoh NU* (Bandung: Mizan).
- Millie, Julian. 2009. "Searching for Hasan Mustapa in Contemporary Indonesia: Commemorations of Indonesian Religious Figures." Paper presented at a workshop pm "Approaching Hasan Mustapa in the Past and Present," UIN Bandung, 21 January 2009.

森山幹弘 2009. 「スندا語の尊重と育成」 森山幹弘・塩原朝子編著『多言語社会インドネシア：変わりゆく国語、地方語、外国語の諸相』、59-89 頁。

———. 2005. “Sundanese Print Culture and Modernity in 19th-century West Java (Singapore: Singapore University Press).

———. 2008. “Revival of the Sundanese Language?: Some preliminary Views on a Regional Language in Indonesia,” 『アカデミア 文学・語学編』 第83号、211-226 頁。

———. 2010. “Bahasa Daerah dan Desentralisasi pada Masa Pasca-Orde Baru,” in Mikihiro Moriyama and Manneke Budiman, eds., *Geliat Bahasa Selaras Zaman: Perubahan Bahasa-Bahasa di*

Indonesia Pasca-Orde Baru (Jakarta: Kepustakaan Populer Gramedia), pp. 249-274.

Rosidi, Ajip. 1983. *Ngalanglang kasusastran Sunda*. Bandung: Pustaka Jaya.

———. 1989. *Haji Hasan Mustapa jeung karya-karya* (Bandung: Penerbit Pustaka).

Soekadri, Heru. 1979. *Pahlawan Nasional Kiyai Haji Hasyim Asy'ari*. Jakarta: Depdikbud.

Turmudi, Endang. 2006. *Struggling for the Umma: Changing Leadership Roles of Kiai in Jombang, East Java* (Australian National University Press: Canberra).

もりやま・みぎひろ
外国語学部アジア学科教授・第二種研究所員